



スケール、泳ぎ、高巻き、雪渓、どれも一級品！憧れの険谷遡行

飯豊連峰

飯豊川本流～文平沢右俣

石井

【日時】 2007年8月11日～15日

【メンバー】 石井 (L)、棚橋、田邊

飯豊川への道程

三面川竹ノ沢、東大鳥川西ノ俣沢、胎内川坂上沢等など…。これまで飯豊・朝日の本流筋を何本も遡行していながら、何故か手を出すのが躊躇われてしまっていた、飯豊川。その訳は、グレード云々という数字では表されることのない「凄味」を感じさせられていたからだろうか…。今冬の少雪、今後の家庭の事情に加え、奇跡的に長い休みの確保できた今年こそ、チャレンジする最後のチャンスだろう、ということで満を持してプランニングする。棚橋さん、田邊さんという最強のメンバーが確定し、加えてこの上なく安定した晴天続きの週間予報。ただ、結果的にシーズン始めから山菜山行以外で泊まりの沢には出かけられず、年明けからの山行日数も少なめ、さらに一週間前に風邪をひいて山行キャンセルという状況だった私としては、期待と不安が入り混じっての出発となった。

圧倒的な水量のゴルジュ、これこそ本流遡行！

8月11日 晴れ

前夜、日本海東北道から新発田の町を経て加治川治水ダムに着く頃には深夜3時近くになっていた。ダム公園の傍でゴロ寝していると、早い時間から日が差して寝起きの悪い朝を迎える。もう少し早く出たかったところだが、8時半近くになって車をダムの駐車場に置き、加治川林道のゲートを越えてようやくスタートだ。飯豊川右岸高くに付けられた林道には遮る木々が少なく、照りつける日差しも強烈なので、大汗をかきながらの林道歩きとなる。ここ数年崩壊の危険があるということで通行止めとなっているが、林道自体に崩壊箇所などは無く、2時間近い余計なアプローチが恨めしい。登山道をなおも辿るとブナ森が多くなっていくらか涼しいが、北股川を吊橋で渡る部分は急な上り下りとなって消耗する。山間の秘湯・湯ノ平温泉に着く頃にはすっかりバテ気味となり、「やおきの泉」で潤しながら少しゆっくりする。

階段を下って、少し上流にある野趣溢れる湯船を横目に、いよいよ入渓だ。暫くは川幅ほぼ一杯の水量と圧迫感のないゴルジュ気味の溪相に1～2m程度の落ち込みがかかり、左右に徒渉しながらの遡行だ。幸い気温が高いので、水温は心地良い程度に冷たく、泳ぎは全く苦にならない。真夏の強烈な日差しが淵を青みがからせて美しい。一箇所、へつり下りでバランスを崩した棚橋さんが15m位流されるが、危険な場所ではなかったため、事無きを得る。ヨモギ沢を右に見て、出てくる淵を快適に越



えていく。楽しいレベルの突破が続き、「楽勝」と思っていると、その考えはやはり甘かった。

福取沢手前のゴルジュまで来ると流れの強い落ち込みが続き、水中ショルダーや微妙な登攀も出てきて、一気に本気モードにさせられる。ふと先を見ると先行パーティーが左岸のルンゼを登っており、少し先に行くと突破困難な小滝が大水量を落としていく。ここはやはり水線通しには辿れず、棚橋さんが右壁をリードして高巻いて越えていくが、見た目以上に悪くて苦勞する。樹林帯を少し進んで福取沢の滝下を渡ると、また泳ぎが出てくる。難なく過ぎていくと再び流れの強い淵の奥に登れない滝が懸かっており、先行パーティーがロープを出している。

下に居た3人パーティーの女性には見覚えがあるなと思っていたら、ぶなの会のNさんの3人パーティーで、先行のパーティーはMさんだった。

ぶなパーティーにやや遅れて、右岸の草付き混じりの少し左側に石井がロープを引く。登りはそれほど悪くはないが、結局ブナ森の高さまで巻き上がるしかなく、ゴルジュの上を黒沢出合上の小沢まで高巻く。降り立った滝上から下流に目を向けると、20mくらいスッパリ立ったゴルジュ内に大水量が荒れ狂い、とても登れたものではなく、さすが飯豊本流、と納得させられる。そこからはいくらか谷が開け、遡行は容易。少し進んだ右岸の川原にMパーティーが先着しており、他に泊まれるような場所も無いので傍にツェルトを張らせてもらうことにする。

焚火を囲み、互いの健闘を称えあい、あるいは明日以降の遡行に思いを馳せながら、少ないビールを開けて早めに休む。

抜きつ、抜かれつゴルジュを進み、消耗戦の大高巻き

8月12日 快晴

わかってはいたことだが、翌朝はいきなりの泳ぎ2連発から始まる。しかも最初の方は30mほどの泳ぎでやや流れが強く、上り口が悪い。Mパーティー上がりにくい右岸のバンドから巻き、Nパーティーは先に泳いでいった。これを過ぎるとしばらくは比較的開けた川原だが、30分ほど経った頃、棚橋さんが幕場にヘルメットを忘れてきたことが判明。念のため石井が見届けつつ、二人で取りに戻ったが、冷えて帰りは泳いで進めなかったので、巻きルートを選択した。

戻ると田邊さんがザックを少し先に運んでくれており、先行の順番待ちをしていた。谷を塞ぐ巨大なチョックストーンに奔流が轟々と荒れ狂い、ルートは左側のクラック状にとるしかない。小一時間待つて下部は田邊さんが胸まで浸かる釜からキャメロットをかませて這い上がり、上部は石井が詰まった倒木を利用し、代用アブミを使いながらオポジション気味に抜ける。もちろん荷揚げが必要だ。

少し進むと谷がやや右へと曲って、側壁は20m近く垂直になり、行く先に不安を感じながら泳ぎを交えつつ越えていく。いよいよヒルカルが悪場だ。右岸に20mくらいの支流の滝が落ち、大きな釜の奥に流れの強い落ち込みをもった淵は、豊野さん



の本でも苦労したとあったポイントだ。年によって状況は違うようだが、先行するMさんも泳いで右壁に取り付いたものの、先に進んでいない。石井がロープを引いて側壁を泳ぐも、やはり流れが強くてへつり泳ぎでの突破は無理。右壁へと登り、きわどいトラバースから細いクラックにナッツをかませる落ちて込みへと降りてどうにか突破、後続はザックピストンで淵を引っ張る。

なおも泳ぎを交えてゴルジュを行くと再び大水量の落ち込みがあり、泳ぎも巻きも絶望的。ここは右岸側ルンゼ状の岩場を上るより他になく、40mほど慎重に登って灌木帯に入った。不動滝はまだ先であるのは承知の上だが、ゴルジュの側壁の高さとこれを昇り降りする労力・リスクを考え、不動滝上まで巻き続けることにする。水面から100mくらい上の、足元が比較的安定しているブナ交じりの樹林帯をトラバースして進むのだが、暑くて消耗、枝沢を横切る度に休んでは水をがぶ飲みする。やはり雪が少ないのだろうか、例年滝下に残るといふ雪渓は無く、不動滝はただ一条の瀑水となって飯豊川の全水量を50mの高さから落とし、低い轟音を谷間に響かせている。

足下に水面が近づき、20mの懸垂でようやく不動滝上の本流に下りる。正味3時間以上を費やした巻きが終われば、あとは軽い泳ぎがある程度、照りつける太陽の下で気楽な遡行となる。その名の通り出合に大岩のある大石沢、滝を掛けて落ち合う平次郎沢、出合に岩小屋のあるゴーロの孫左衛門沢を過ぎると、本流は下部ゴルジュが嘘のような広川原となる。滝を掛ける平野沢、やや荒れた感じの赤谷沢を過ぎれば、今日の幕場の洗濯沢出合はすぐ先であった。

広々と開けた洗濯沢出合は飯豊川においてはまさに別天地、砂地の快適な幕場に薪も豊富にある。まだ日も高いので淵で泳いだり昼寝をしたりしていると、Nパーティー、Mパーティーも続いて到着、夜は燃え盛る焚火を囲んでの交流宴会を楽しんだ。涼しくて虫も少なく、星空の美しい快適な夜だった。

高巻き7時間、そして雪渓処理の連続…

8月13日 快晴

これまでは計画通りの行動で来られた。しかし、一番の不確定要素は雪渓であり、洗濯沢～文平滝間の状況はその年によって大きく異なる。過去の記録の所要時間・苦労度もこれに比例しているため、今日が一番の核心となるだろう。ということで6時前に出発。狭まった谷を進むが、昨日までに多くの支流を分けているので、水量はだいぶ少なくなっている。100mはありそうな、立派な赤渋沢出合の大滝を左手に見上げると、谷は右へと曲がって急に側壁を立て、淵の奥に登れないような小滝を掛けている。ここは右岸のルンゼから巻くのが定石のようだが、登り易そうではないので、スパイクを付け、敢えて左岸側から巻いてみることにする。小尾根に取り付けて登り、草付から小沢を渡ってできるだけ低い高度でトラバースしたかったが、急傾斜の草付とスラブに阻まれて果たせず、結局尾根に追い上げられる。ただ、右岸を巻いたとし

でもゴルジュ内は通過不能に見える小滝が連続し、上流には不安定な雪渓が掛かっていたので、楽とはいえないだろう。

尾根を登りつめるときりが無いので、できるだけトラバースを考えてスラブに移るも、これまた上へ上へと登らされ、結局水面から標高差300m近くは追い上げられたことになる。上がったからにはできるだけトラバースを考えながら下ることになるのだが、スラブと急傾斜の灌木帯が連続し、田邊さんが先頭に立って懸垂とクライムダウンの連続となる。小尾根をいくつも回りこみ、トラバースできるヤブが無くなり、谷が近づいたところで最後の懸垂、ようやく水面に降り立つ。

直線距離にして僅か500m程度の距離を合計7時間余り、50mいっばいで5回の懸垂を交えて巻いたことになる。既に他パーティーは先行していったようだ。

今にも崩れそうな、門のような雪渓を抜けると地蔵カル沢が滝を掛けて出合い、本流は再び雪渓に覆われる。50mほどくぐって、さらにもうひとつ、あるいはブロックの間を通過、というように、これより上の本流筋の残雪量は決して少なくなく、平年並みといったところのようだ。やや開けた巨岩帯の滝を登るところで棚橋さんが5mほど滑り落ち、ザックから落ちたので腰を軽く打った程度ですんだが、ヒヤリとする。険悪そうな大日沢を右から合わせると再び雪渓が現れ、滝谷沢出合付近は雪渓の側壁を進むか、くぐってやり過ごす。

谷が右に曲がるとまた登れないチョックストーン滝が現れ、Mさんたちが右岸の急斜面をなぜかこちらに向けて降りてきていた。聞けば、先の状態が悪いので、今日は少し早いに戻って泊まる、とのこと。急斜面を登って小尾根に上がるとその先が見えるが、垂直に切れ込んだゴルジュに架かる足下の雪渓は切れ目が多くて悪相だ。先行するぶなパーティーに続き、45mの懸垂で沢に下り立ち、雪渓を潜って先に進む。雪渓下の泳ぎを交え、ブロックを縫いながら進むと、クランク状に曲がったゴルジュは雪渓で覆われ、まるで洞窟のようだ。ぶなパーティーは不気味に思って左岸から巻くというが、側壁は高く、灌木帯まで巻き上がるのも容易ではない。既に時間は4時を回っている。ゴルジュに突っ込んでも行く先に何が出てくるかは分からない。しばらく躊躇しながらも、数多くの雪渓を潜ってきた田邊さんの判断もあり、突っ込むことにする。右に左に曲がる雪渓のゴルジュ内は、隙間から差し込む光でどうにかヘッドランプ無しでOK。しばらくは幸い浅瀬と小滝のみで、何とか先に進めたが、200m位進んだ辺りで案の定というべきか、5mくらいのトイ状の滝に行く手を阻まれる。さて、どうするか。迫る夕闇、冷気で冷える体…。よく見ると、右の側壁なら何とかかなりそうだ。雪渓との隙間を泥だらけになりながら15mくらい這い上がり、辛くも雪渓上に出ることができた。

クレバスを慎重にやり過ごし、雪渓を進んでいくが、今度は泊場が心配、できることなら雪渓上は避けたい…。と欲していたら、田邊さんが左岸のガレ場の途中が泊まれそうだという。どうかと思っていたが、雪渓の終わる手前から左岸に移って登ってみると、整地すれば3人が横になるには十分そうだ。実際、土木工事を施せばツエル



トは普通に張れた。雪溪の切れ間から水面に歩いて降りられ、泥だらけの体も洗うことができた。焚火もでき、まずは快適に休むことができた。ここまでが核心といったところなのか、上流を見るといくらか谷も開けてきており、気持ち的にもだいぶ楽になった。ただ、長い高巻きのせいか、この日から足全体が靴擦れのようになり、テーピングが欠かせなくなった。また、うす暗くなる7時前でも笛の音が谷間に響いていたが、その後ぶなとMさんのパーティーには会わず、少し気がかりであった。

なおも続く雪溪、文平滝を越えて稜線へ

8月14日 晴れ

核心は抜けつつあり、今日中に御西小屋まで行けるだろうと踏んだのと、昨日の疲れも少しゆっくりめの出発。雪溪は泊場の少し上流の滝場で途切れているので、左岸の草付と灌木帯を進む。傾斜は比較的緩く、次の雪溪にも歩いて下りられた。暫く雪溪歩きとなったが、天狗沢の少し手前で終わっていたので再び左岸の灌木帯に移り、30mの懸垂で沢に下りる。既に谷の規模はそう大きくはないが、続く4m、7mが登れず、右岸を登り返す羽目になる。

ブロックの残る天狗沢出合で休み、また雪溪に上ると、厚みのある安定した雪溪が延々と続き、歩もはかどる。御西沢を分けて文平滝の下まで、さすがに何もないと早い。雪溪から飛び降り、文平滝に左から取り付く。下半分は雪溪の高さで稼ぎ、傾斜も緩めで残置ピンもあるので、まずは快適な登りだ。5mの懸垂で滝上に立ち、小滝を登ると不整形な三俣となるが、真ん中が目指す右俣だ。雪溪で覆われていたので、最初は間違えて枝沢の方に入ってしまった。潜って右俣に入るも最初の滝が登れず、結局雪溪に上がって左岸の小尾根を進み、20m懸垂する。

これより上は一部巻くような滝があるものの、概ね直登可能な連瀑が続き、快適に高度を稼いでいく。青い空と白い雲、ほとぼしる水流、緊張から解き放たれて正に「楽しい沢登り」だ。右に支流を2本分けた先に雪溪が残っていたが、これももはや「ブリッジ」ではなく、「残雪」のようなものだ。やや谷が右に曲がり、大日岳正面に向かうゴーロではなく、左の水の無い支流に入る。さしもの飯豊川もここまで来るとさすがに滝も無くなり、ゴーロと緩い雪溪のみとなって、やがて笹藪へと突入した。左俣の方が文平の池に出るので藪は少ないらしいが、ここは敢えて大日岳に近い方を選んだので、止むを得ない。だんだんと酷くなる靴擦れに苦しみながら、30分くらい藪をこいでようやく3時過ぎに登山道に出た。

ついに飯豊川の遡行を終了し感無量であった。だが、普通に歩くのもままならないような状態の靴擦れでこの飯豊の山深い所に居ては、翌日の長い下山も心配であった。大日岳を往復し、ほとんど平らな道を御西小屋へと向かったが、顔をしかめながら痛みを堪えて無理矢理歩くような状態だったので、田邊さん、棚橋さんに30分近く遅れをとってしまった。夕暮れの御西小屋には大又沢を登ってきた別のぶなパーティーが泊まっており、いろいろ話しをする。明日は門内小屋で集中だというのが、飯豊川の



パーティーは夜になっても来なかった。この日は350mlで1000円という超高額にもかかわらず、誘惑に負けてビールを買い込み、無事遡行を祝う。

石転び沢を下り、佐藤(仁)さん宅へ

8月15日 曇りのち晴れ

御西からはどこへ下りても一日がかりであるが、足の状態を考えればできるだけ短い距離にしたい。行く先に車はあるが、長いオウインの尾根は却下、石転び雪渓を下ることにする（時間的にはダイグラ尾根がやや早かったようであるが）。

烏帽子岳を経て梅花皮小屋までアップダウンのある登山道に行くが、比較的斜度が緩いのと曇りの天候に助けられ、足の手当ても少しはできたので、コースタイムよりやや早いくらいで行動できた。梅花皮小屋では慶応吾妻山荘のご主人（吾妻の遭難で尽力いただく。小川君とも旧知）にお会いした。

石転び雪渓は黒滝より上部の雪は消えているものの、門内沢の300mくらい上までしっかりと残っており、スパイクでさくさくと下ることができた。門内沢出合で左岸に移り、梶川の出合、砂防ダムを経て温身平へと下るが、下部では日が照り、大汗をかきながら暑さでバテ気味になりながら歩く。バスの時間も気になり、最後は林道を早足で進み、飯豊山荘が見えてきた時にはようやく無事に帰れる、という思いが正直なところだった。

ビールを飲んでいるとすぐにバスが来て、小国へと下る。佐藤(仁)さんと連絡が取れ、車の回収に新発田に向かうには接続も悪いので、直接鼠ヶ関に向かうことにする。列車の時間まで間があったのでショッピングセンターの100円ショップで着替え等を買って、沢の格好のまま米坂線と特急を乗り継ぐ。タクシーで近くの温泉に向かい、ようやく汗を洗い流し、再びタクシーで佐藤(仁)さんのご実家へ。毎年のことながら、ビールと魚介類を初めとしたおもてなしでお世話になる。例年ならそんなことはないのだが、今年は異常な暑さで、夜でも寝苦しかった。

翌日は駅まで送ってもらい、新発田から加治川ダムまでタクシー（6000円）で車の回収に向かう。関越の渋滞も大したことなく、明るい内に八王子に着いた。

天候、そしてメンバー

今回は多くの期待と不安を抱えながらの出発であったが、終わってみればほぼ全ての面でうまくいった山行であった。まずは天候、週間予報でこれだけ確実に好天を保障してくれたようなお盆も珍しい。大水量の沢に入るにあたり、この部分に気を回さなくて良かったので、気持ち的にはかなり楽になった。続いてメンバー、地力は言わずもがなな田邊さん、棚橋さんというメンバーは大変心強かった。悪場を処理していく過程でトップを随時交代することができ、体力的にも随分と力をセーブすることができたのが大きい。一人で全てをやっていたらとても持ったものではない。

ルートとしてのポイントを整理するなら、やはり最大の核心は赤渋沢～天狗沢間の

雪溪の状態であると思う。ヒルカルの悪場もかなり悪いが、そのポイントとなる情報は今後も蓄積されていくであろうし、それにより難度も下がっていくと考えられる。しかし、雪溪に関しては年・季節により同じ状態ということがなく、その時々での現場の状況で判断を下さなければならないところに難しさがある。特にこの区間のゴルジュは、水量こそ多くはないものの、その側壁は垂直なだけに厄介である。もちろん、天候に恵まれないことには相当の困難を伴うことになる。

だがそれらもまた、数々の困難を知力・体力で乗り越えていくという、沢登りの持つ根本的な楽しさであることに変わりはない。そういった意味では総合力の問われる、沢登り本来の楽しさが詰まった沢といっても過言ではないと思う。

【コースタイム】

8月11日 飯豊川治水ダム (8:25) - 林道終点 (10:25) - 湯ノ平温泉 (11:55/12:25)
- 福取沢手前高巻 (14:30/15:45) - 黒沢出合先泊場C 1 (17:40)

8月12日 C 1 (6:10) - 7mCS滝 (6:35/8:10) - 不動滝巻き始め (10:00) - 不動滝上 (13:45/14:10) - 洗濯沢出合C 2 (15:40)

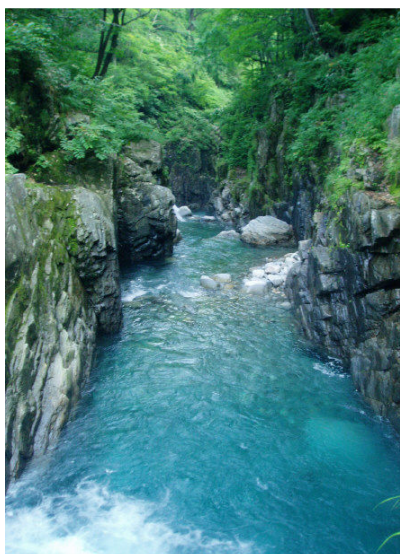
8月13日 C 2 (5:50) - 赤渋沢出合 (6:10/25) - 地藏カル沢出合下 (13:30/45) - 屈曲部入口 (16:00) - 滝谷沢～天狗沢中間のガレ沢C 3 (17:20)

8月14日 C 3 (6:40) - 天狗沢出合 (9:00/20) - 文平沢大滝 (9:40/10:30) - 奥二俣 (ガレ沢) (13:00/15) - 1970m付近登山道 (15:05/20) - 大日岳 (15:45/55) - 御西小屋 (17:30)

8月15日 御西小屋 (6:50) - 梅花皮小屋 (10:00/30) - 飯豊山荘 (15:30)

【地形図】 1:25000 東赤谷、蒜場山、二王子岳、飯豊山、大日岳、長者原

【グレード】 5級上



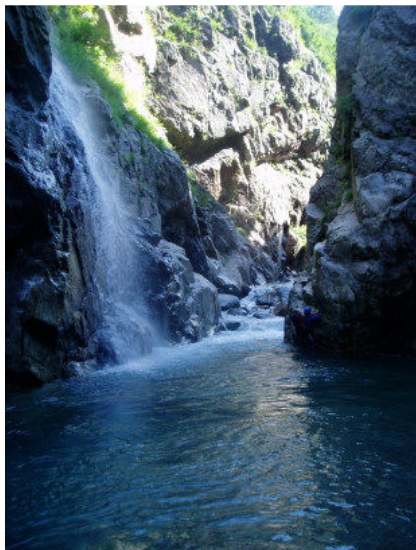
黒沢出合付近の溪相



チョックストーン滝7mを登る



ヒルカルの悪場入口付近



1m チョックストーン滝



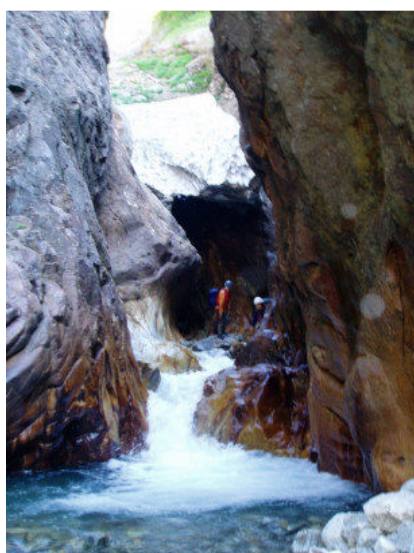
不動滝上の穏やかな溪相



赤沢沢出合先の通過不能の滝



地藏カル沢出合手前の雪溪



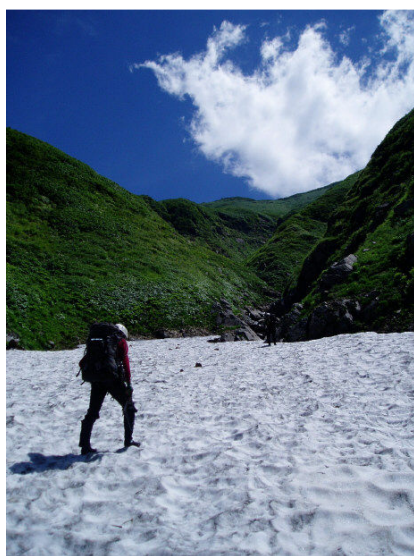
滝谷沢出合先のゴルジュ



3日目のガレの途中のテン場



文平滝手前の分厚い雪溪



源流部の雪溪



源流より北股岳を望む

飯豊川への想い

棚橋

今でも「夢だったのでは」と思うような4日間であった。この上なく強力なメンバーに恵まれ、これ以上は望めない天候にも恵まれ、また万物の御加護を受け、飯豊川本流を無事遡行することができた。

石井さん、田邊さんとの3人での大きな遡行は2000年お盆の枳形川以来で、本当に久々であったのにも関わらず3人でのプレ山行を行えなかった(各々とは今シーズンも遡行はしたが)。しかし遡行中、判断・行動に意見が大きく食い違うことは無く、同じ会で活動していると久々であっても自ずとそうなるのか。それはさて置き、相変わらず頼もしく信頼のおける面々であった。

2005年の元日にトマメールで「一年の計は元旦にあり」と、様々な気持ちが交錯する中、飯豊川本流遡行希望を宣言し同意者を募ってからは、私の頭の中から飯豊川本流が離れることはなかった。果たして憧れの大渓谷は私をすんなり通してくれるのか、もっと準備を行うべきではないかなどと考えていると、どうしても臨むことに二の足を踏み続けてきた。しかし、どうしても完全遡行したかった。今は漸くその呪縛から解放され、清々しい気分だ。

飯豊川本流は、険谷の中で4日間も緊張や困難を強いられるのが大きなプレッシャーであった。更に下山にも1日を要する。実際に遡行してみて改めて感じたことは、本流であるが故の水量の強さ。それは少しのミスでも簡単に流されてしまう。また瀨では水流の太さとして、泳力がないと苦しめられる。それから一見して小さな巻きなど望めない、豪雪に磨かれた側壁。2mの落ち込みや小さな滝でも、登れなければ7時間にもおよぶ大高巻きや悪い草付トラバースも避けられない。極めつけは、日刻刻と変化する雪渓の状態。こればかりは行ってみないとその時々状態は分からないので、シミュレーションすることなど叶わない。また入渓中に、状態が段々良くなることなども考えられない。それらに悪天候が加わると、更に困難度は増大する。在り来りな表現ではあるが、総合力が求められる渓であった。

疲労の蓄積を感じつつも、日に日に体が溪に馴染んでいくのを感じられたのは、沢登りを始めたばかりの頃以来の感覚だった。近年は山行活動の興味の対象が雪山に傾きつつあったが、今は沢に行きたくて堪らなくなった。「また溪へ向かおう。」

飯豊川本流～文平沢右俣

2007.8.11～15 作図：石井幸志

(石転び沢～飯豊山荘下山)

グレード：5級上

